

# 五月より

泉鏡太郎

青空文庫



五月ごぐわつ

卯うの花はなくだし新あらたに霽はれて、池いけの面おもの小さ濁にごり、尚なほ遅おそく櫻くらの影かげを宿やどし、椿つばきの紅べにを流ながす。  
 日ひ闌たけて眠ねむき合あ歡むの花はなの、其その面おも影かげも澄すみ行ゆけば、庭にはの石いし燈とう籠ろうに苔こけや、青あをうして、野の  
 ばらばらしろしろよよひひつきつき、茨あざに白しろき宵よひの月つき、カタカタと音おと信づる、鼻はな唄うたの蛙かへるもをかし。鄙ひなはさて都みやこはもとより、衣きぬ輕ろ  
 く戀こひは重おもく、凄つあ淺さく、袖そで輝あやき風かぜ薫かつて、鼻みどりの中なかの涼ひが傘さの影かげ、水みづにうつくしき翡ひす翠すゐの色いろかな。  
 浮う草きくさ、藻もの花はな。雲くもの行ゆく方へは山やまなりや、海うみなりや、曇くもるかかとすれば又また眩ぼき太たい陽やう。

六月ろくぐわつ

遠をち近ちの山やまの影かげ、森もりの色いろ、軒のきに沈しづみ、棟むねに浮うきて、稚をさ子なごの船ふね小こ溝みぞを飛とぶ時とき、海い豚るかは群む  
 れて沖おきを渡わたる、凄すこきは鰻うなぎ搔かく灯ともしぞかし。降ふり暮くらす昨日きのふ今日けふ、千せん騎きの雨あめは襲おそぶが如ごとく、伏ふ屋せや  
 も、館たちも、籠こもれる砦とりで、圍かこまる、城しろに似にたり。時ほと、鳥との矢や信ぶみ、ささ蟹かにの緋ひ緘をとしこそ、血ちと  
 紅くれなの色いろには出いづれ、世よは只ただ暗やみ夜みと侘わびしきに、烈れつ日じつ忽たちち火ひの如ごとく、窓まどを放はなち襖ふすまを排ひらける夕ゆふべ、

紫陽花の花の花片一枚づつ、雲に星に映る折よ。うつくしき人の、葉柳の葎着たる忍  
 姿を、落人かと思れば、豈知らんや、熱き情思を隠顯と螢に涼む。君が影を迎ふ  
 るものは、たはれ男の獺か、あらず、大沼の鯉金鱗にして鰭の紫なる也。

しちぐわつ  
七月

山に、浦に、かくれ家も、世の状の露呈なる、朝の戸を開くより、襖障子の遮るさへ  
 なく、包むは胸の羅のみ。消さじと圍ふ魂棚の可懐しき面影に、はらくくと小雨降添  
 ふ袖のあはれも、やがて堪へ難き日盛や、人間は汗に成り、蒟蒻は砂に成り、蠅  
 の音は礫と成る。二時さがりに松葉こぼれて、夢覺めて蜻蛉の羽の輝く時、心太賣る  
 翁の聲は、市に名剣を鬻ぐに似て、打水に胡蝶驚く。行水の花の夕顔、納  
 涼臺、縁臺の月見草。買はん哉、甘い甘酒の赤行燈、辻に消ゆれば、誰そ、  
 青簾に氣勢あり。閨の紅麻艶にして、繪團扇の仲立に、蚊帳を厭ふ黒髪と、峻  
 嶺の白雪と、人の思は孰ぞや。

はちぐわつ  
八月

月のはじめに秋立てば、あさ朝顔の露はあれど、濡るゝともなき薄煙、軒を繞る  
も早の影、炎の山黒く聳えて、頓て暑さに崩るゝにも、熱砂漲つて大路を走る。なやまし  
き柳を吹く風さへ、赤き蟻の群る如し。あれ、聞け、雨乞の聲を消して、凄じく鳴く蟬  
の、油のみ汗に滴るや、ひとへに思ふ、河海と山岳と。峰と言ひ、水と呼ぶ、實に戀  
人の名なるかな。神ならず、仙ならずして、然も其の人、彼處に蝶鳥の遊ぶに似たり、  
岨がくれなる尾の姫百合、渚つたひの翼の常夏。

くぐわつ  
九月

宵々の稻妻は、火の雲の薄れ行く餘波にや、初汐の渡るなる、海の音は、夏の車  
の歸る波の、鼓の沓に秋は來て、松蟲鈴蟲の容も影も、刈萱に萩に歌を描く。野人  
に蟻螂あり、斧を上げて茄子の堅きを打つ、響は里の砧にこそ。朝夕の空澄み、水清  
く、霧は薄く胡粉を染め、露は濃く藍を溶く、白群青の絹の花野原に、小さき天

んによあそ  
 女遊べり。織きこと縷の如し玉蜻と言ふ。彼の女、幽に青き瓔珞を輝かして舞へば、  
 やまはすつきさしのぞ  
 山の端の薄を差覗きつゝ、やがて月明かに出づ。

じふぐわつ  
十月

きみし  
 君知るや、夜寒の衾薄ければ、怨は深き後朝も、袖に包まば忍ぶべし。堪へやらぬ  
 まで身に沁むは、吹く風の荻、尾花、軒、廂を渡る其ならで、蘆の白き穂の、ちらくくと、  
 あこがれ迷ふ夢に似て、枕に通ふ寢覺なり。よし其とても風情かな。折々の空の瑠璃色  
 は、玲瓏たる影と成りて、玉章の手函の裡、櫛笥の奥、紅猪口の底にも宿る。龍  
 膽の色爽ならん。黄菊、白菊咲出でぬ。可懐きは嫁菜の花の籬に細き姿ぞかし。山家、  
 村里は薄紅の蕎麥の霧、粟の實の茂れる中に、鶉が鳴けば山鳩の飴する。掛稻  
 の春暖かう、燕に早起初霜溶けて、細流に又咲く杜若。晝の月を渡る雁は、また  
 戀衣の縫目にこそ。

じふいちぐわつ  
十一月

傳つたへ言いふ、昔むか越とつぎん山の蜥と蜴かは水みづを吸すつて電へうを噴ふく。時とき、冬ふゆの初はじめにして、槐えんじゆの鴉もすは星ほしに叫さけ  
 んで電あられを召よぶ。雲くも暗くらし、雲くも暗くらし、曠あらの野のを徇さまよ行かりふ狩かりの公こう子しが、獸けものを照てらす炬たいまつ火は、末うらが枯がれの  
 尾お花はなに落おち葉はの紅べにの燃もゆるにこそ。行ゆき暮くれて一ひと夜よの宿やどの嬉うれしさや、粟あは炊かしぐ手てさへ玉たまに似にて、  
 天てん井じやうの煤すすは龍りゆうの如ごとく、破やれ衾ふすまも鳳ほう凰わうの翼つばさなるべし。夢ゆめ覺めめて絳かうらん欄へきけん碧ひ軒けんなし。  
 芭蕉ばせの骨ほね巖はまの如ごとく、朝あさ霜しも敷しける池いけの面おもに、鴛ゑん鴦あうの眠ねむ尚なほ濃こまなるのみ。戀れん々くとして、  
 ていくわい 徊やうし、漸さくにして里さとに下くだれば、屋や根ね、廂ひさし、時し雨ぐれの晴はれま  
 あり、小こ橋はしの稚うな子み等らの唄うたふを聞きけ。(おほわた) 來こい、來こい、まゝ食くはしよ。

じふにぐわつ  
 十二月

それ、おほみそかは大おほ薩ざつ摩まの、もの凄すこくも又また可おそ恐そしき、荒あらう海みの暗や闇みのあやかしより、  
 やまでら 山やま寺でらの額がくの魍まうり魍やうに至いたるまで、雲みを鍊ねつて氷こほりを鑄いつゝ、年としの瀬せに楯たてを支つくと雖いへども、巖い  
 間はまの水みづは嘯さうきて、川かは端はたの辻つじ占うらに、春はる衣ぎの梅うめを告つぐるぞかし。水すゐ仙せん薫かる浮う世きよ小こう路ちに、  
 やけ酒さけの寸すん法ぽふは、鮫あん鰈かうの肝きもを解とき、懷ふと手ころの方はう寸すんは、輪わ柳やなぎの絲いとを結むすぶ。結むすぶも

解<sup>と</sup>くも女<sup>をんな</sup>帯<sup>おび</sup>や、  
い<sup>う</sup>つも鶯<sup>うぐひす</sup>の初<sup>はつ</sup>音<sup>ね</sup>に通<sup>かよ</sup>ひて、  
春<sup>はる</sup>待<sup>まち</sup>月<sup>つき</sup>こそ面<sup>おも</sup>白<sup>しろ</sup>けれ。

大正八年五月—十二月



# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「五月《ごぐわつ》より」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 五月より

泉鏡太郎

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>